# ドイツ機械制綿工業における労働力の編成と選択について

## ——M・ベルナイスの社会政策学会調査報告（一九一〇年）——

小林　純

はじめに
一　工場の歴史と調査内容
二　調査結果の検討

### はじめに

対象の限定

本稿は、ドイツ社会政策学会が行なった工業労働調査（大工業労働者の選択と適応）[1]の調査報告の一部であるマリー・ベルナイスの研究[2]によって、機械制綿工業における労働力の具体的存在形態を明らかにしようするものである。周知の如く資本は、技術的構成の高度化した機械制工場生産においては、機械の導入により単純作業による熟練作業の代替をある程度進行させるとはいえ、その装置・技術体系に応じた労働力の獲得並びに編成を行なわねばならないから、熟練労働者の確保はやはり操業の要件である。従ってその際、どこから、どれだけの量の、どういう質をもった労働者を自由にリクルートできるか、が重要な一条件となる。本稿はこの問題について、第二帝政期ドイツの一綿紡織会社の事例研究という形で、労働者の出自、工場内編成、陶汰等の諸点を検討したい。

この問題領域に関するわが国での研究史上、本稿との関係で重要と思われるもの三点について簡単にふれ、本稿の課題の位置をまず示しておこう。

一　ドイツ資本主義の労働力市場の基本像は藤瀬浩司氏の研究「十九世紀ドイツにおける労働力の農業離脱」[3]によって与えられる。これによると、プロイセンの東部と西部では——東西農業の「二元的構成」に規定されて——農業離脱が対照的な型を示す。即ち1、東部では農業離脱が農村離脱としてあらわれ、離脱した労働力はすぐれて遠隔地へ、主にベルリン工業地帯とライン・ヴェストファーレン鉱業地帯へと移動している。

2、西部では農業離脱と農村離脱が直接に結びつかず、地方的小工業中心地が農村在住者を労働力として吸引する。3、二つの型は、一八六〇年代後半から問題となる東部労働力の「西部への移動」によって連繋される。藤瀬氏の主眼は「農業離脱」の研究であるから、もし「労働市場」[4]の語をここで用いるとするなら、これは追加的工業労働力の供給源の研究のひとつと位置づけられよう。本稿での西部の綿工業では、後述の如く2の妥当性を実証しうる。また追加的労働力に関しては、手工業から賃労働への移動の大きさが示されることになる。

二　次に「ドイツ資本主義の発展と『賃労働』の存在形態」を対象とした大野英二氏の研究がある。氏の「ベルリン機械工業における労働関係」[5]は、上記の社会政策学会の調査報告をも利用している。ただ、大野氏の対象は機械工業及び石炭工業（「第一部門」）[6]に限られている。

三　同時代の労働者の生涯・生活意識を対象としたものに、三宅立氏の「第一次世界大戦期のドイツにおける『プロレタリア』の世界――労働者の自伝、水兵の日記などを手がかりとして――」[7]がある。これは副題に示されるように、同時代人の記述を紹介しつつ、「等身大」の歴史を描こうとする興味深い試みである。本稿も賃労働者を対象とし、具体的存在形態を明らかにしようとする点では三宅論文に近い関心をもとにしているが、ただ観点は異なる。つまり、その「プロレタリア」の機械制工業における賃労働という面に即して、大量現象の一断面を

**第1表　ドイツ綿工業の伸長**

| a．綿製品需要 | 年1人当り（kg） | b．綿織布業の綿消費（綿くずを除く，t） | | c．家内工業綿織布業就業者（全綿織布業就業者中） | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1836—40 | 0.34 | 1859 | 47,900 | 1882 | 52,162（41.5%） |
| 1856—60 | 1.39 | 1875 | 114,000 | 1895 | 33,208（22.6%） |
| 1871—75 | 2.84 | 1895 | 283,400 | 1907 | 21,358（13.4%） |
| 1891—95 | 4.95 | 1907 | 459,110 | | |
| 1901—05 | 6.15 | 1913 | 430,000 | | |
| 1913 | 7.23 | | | | |

(H. Michel, S. 46)



みようとするものである。[8]

## 機械制綿工業の発展とM・グラートバッハ

一九世紀後半のドイツ綿織布業の展開は、第1表のa、bに示される如く著しいものがあるが、それは、手織機の家内工業を駆逐しつつ（第1表c）伸長してきた力織機装備の工場生産によって主に担われてきた。また国内の綿糸自給率も、藤瀬氏の推計では一八七五年で八八%を越えている。[9]

ニーダー・ライン地方の綿工業の中心地となるグラートバッハ、ライト地域では、この地方全般にみられるように、古く

**第2表**[12] 1907年職業統計でのグラートバッハ繊維工業

| 業種 | 主経営数 | 副経営数 | 工業就業者 | うち労働者 |
|---|---|---|---|---|
| Stadtkreis München=Gladbach | | | | |
| 羊毛紡績 | 4 | — | 489 | 461 |
| 綿紡績 | 18 | — | 2,457 | 2,305 |
| 羊毛織布 | 29 | — | 3,007 | 2,736 |
| 綿織布 | 54 | 1 | 4,072 | 3,606 |
| 繊維工業小計 | 208 | 3 | 11,912 | 10,795 |
| 全部門総計 | 3,592 | 387 | 27,618 | 20,778 |
| Kreis Gladbach | | | | |
| 綿紡績 | 26 | — | 3,818 | 3,700 |
| 絹織布 | 374 | 18 | 3,376 | 2,700 |
| 綿織布 | 39 | 1 | 2,227 | 1,983 |
| 繊維工業小計 | 539 | 19 | 13,028 | 11,642 |
| 全部門総計 | 5,500 | 828 | 27,248 | 18,989 |

からの麻工業と結びついた綿工業の発展がみられた。とくに一七七〇年以降、地元での労賃上昇に悩まされてヴッパータール（エルバーフェルト等）からやってきた「ファブリカント」が、この地の麻織工を賃労働者として雇い入れて操業を始めたという。フランス支配下の大陸封鎖は綿工業の発展を促した。[10]

その後、とくにM・グラートバッハでは一八四二年に蒸気機関を動力とする紡績工場が設立されて以来、機械制工場への発展をとげることとなる。そして一八五三年創立のグラートバッハ紡織工場は、紡織兼営の大工場として、グラートバッハ商工会議所管内で最大規模のものであった。[11]

一九〇七年の帝国職業統計でみると、グラートバッハ地区では、工業就業者中に繊維工業就業者が四五%以上を占め、そのうちの約九割が「労働者」Arbeiter とされている。純粋に綿のみの紡織部門でその労働者の約半数を占めているところから、この地区が、綿を中心とする繊維工業の一中心地をなしていることが分かる。（第二表）

（1） Auslese und Anpassung (Berufswahl und Berufsschicksal) der Arbeiter in den verschiedenen Zweigen der Großindustrie と題されたこの調査のいきさつについては、さしあたり鼓肇雄「マックス・ヴェーバーの工業労働調査論について」『マックス・ヴェーバーと労働問題』一九七一年（御茶の水書房）九四ページ以下、を参照せよ。社会政策学会は一九一一年の大会の第二日目（一〇月一〇日）を、とくにこの調査の方法と成果をめぐる討議にあてて

いる。*Schriften des Vereins für Sozialpolitik* 138. Bd., Leipzig 1912, S. 115-203.

(2) Marie Bernays, Auslese und Anpassung der Arbeiterschaft der geschlossenen Großindustrie. Dargestellt an den Verhältnissen der "Gladbacher Spinnerei und Weberei" A.=G. zu München-Gladbach im Rheinland. (S. IXX+417.) *Schriften des Vereins für Sozialpolitik* 133. Bd., Leipzig 1910.

(3) 高橋幸八郎編『産業革命の研究』一九六五年（岩波書店）所収。

(4) 氏原正治郎「大工場労働者の性格」（一九五三年）「労働市場の模型」（一九五四年）いずれも同『日本労働問題研究』一九六六年（東大出版会）所収、等の研究を念頭においている。この問題領域については、さらに、氏原「労働市場論の反省」『経済評論』一九五七年一一月、山本潔「京浜工業地帯調査について」『社会科学研究』（東大社研）第二二巻第四号（一九七一年）を参照。

(5) 大野『ドイツ資本主義論』一九六五年（未来社）所収。ちなみに氏はその中で、京浜工業地帯調査結果の、工業諸部門の労働者の出自の差異や金属工と機械工の性格の相違に関する指摘を、「示唆に富む」（同書二四九ページ）とされている。ただ、むしろ逆に、大河内・氏原グループの調査研究が、ヴェーバー発案のドイツ社会政策学会の作業を下敷きにしていたであろうことは容易に想像できる。

(6) 大野「ルール炭鉱労働力の存在形態」同、前掲書所収。「第一部門」という把握の問題性、及び綿業の特定段階にもつ意義を指摘するものに、渡辺尚「産業革命と『ドイツ資本主義』」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』一九七六年、所収。

(7) 『現代史研究』二七、一九七三年八月、所収。G.A. Ritter u. J. Kocka (Hrsg.) *Deutsche Sozialgeschichte. Dokumente und Skizzen, Bd.* II.: 1870-1914, München 1974, の九章「社会的下層」S. 243 ff. には三宅氏の利用されたグーレやブロンメなどの記述が収められ、便利である。

(8) この時期の労働者の把握・理解をめざす研究には、Gerhard Bry, *Wages in Germany 1871-1945*, Princeton 1960 のような資料的利用価値をもつ特定局面の量的把握を行う作業から、Günther Roth, *The Social Democrats in Imperal Germany. A Study in Working-Class Isolation and National Integration*, Totowa, N.J. 1963, や Barrington Moore, Jr., *Injustice. The Social Bases of Obedience and Revolt*, London 1978 (esp. Part II An Historical Perspective: German Workers 1848-1920) のような労働者の社会意識の描写をねらうものまで様々なレベルのものが存在する。ただ、ひとつ言えることは、社会民主党ないし社民党系労働組合の側からなされてきた均質的「労働者層」把握に対する反省・批判がいずれの場合にも自覚的になされてきており、この点は、Hartmann Wunderer, *Arbeitervereine und Arbeiterparteien. Kultur-und Massenorganisationen in der Arbeiterbewegung* (1890-1933), Frankfurt/M 1980, のような「労働者文化」の研究でもはっきりと指摘されている。(S. 12, S. 229 Anm. 3)

(9) 藤瀬「ドイツ産業資本の確立と上からの革命」岡田与好編『近代革命の研究　下巻』一九七三年（東大出版会）所収、一一五ペー

ジ。

(10) Hans Michel, *Die hausindustrielle Weberei Deutschlands. Entwicklung, Lage und Zukunft*, Jena 1921, S. 12, 川本和良「三月前期ライン繊維工業における経営形態」『ドイツ産業資本成立史論』一九七一年（未来社）所収、一〇四ページ。

(11) Bernays, a.a.O., S. 4, 川本前掲書、一〇五ページ。十九世紀中葉のグラートバッハ綿業の展開については、渡辺尚「『M・グラートバハ商業会議所年次報告』分析（一八三八―一八六一）――ラインのマンチェスターは、何をどこから買い、何をどこへ売ったか――」『土地制度史学』第四七号、一九七〇年、に詳しい。

(12) *Statistik des Deutschen Reichs, Neue Folge, Bd.* 118 より。

## 一　工場の歴史と調査内容

### グラートバッハ紡織会社の歴史[1]

ベルナイスの調査したグラートバッハ紡織会社 Gladbacher Spinnerei und Weberei は、一八五三年、三百万ターラーの資本金をもって創立された。同年に百万ターラーの増資がなされている。工場建設や経営組織はイギリスをモデルにした。一八五五年八月に紡錘数一五、〇〇〇で操業開始、年内には二万錘、労働者三七〇人を擁した。この当時すでに腕のいい織布工の不足が嘆かれていたという。一八五七年には、綿糸四―三〇番手、平均的に一四―一五番手が生産され、モスリン、斜文織、ビーヴァー、ファスティアン、コール天等が織られ、販売総額七八万ターラーにのぼった。この時期には、この地方がイギリス綿糸依存から脱け出て自立した生産力をもつようになる。[2] 下ってアメリカ南北戦争期には綿価格の急騰で減産し、一八六四年三一、九七五ターラーの赤字を計上したが、普墺戦争後の一八六七年にはフル操業の活況を呈した。この年、労働時間が一三時間から一二時間に短縮されてい

**第3表　会社の歴史**

| | 紡錘数 | 織機台数 | 労働者数 | 配当率 |
|---|---|---|---|---|
| 1855年末 | 20,000 | | 370 | |
| 1857年 | 36,130 | 350 | 平均 700 | 10% |
| スロッスル | 15,680 | | | |
| ミュール | 20,450 | | | |
| 1867年 | 46,900 | 608 | | |
| 1868／77 | 55,136 | 689 | 1,165 | 8% |
| 1879／88 | 53,661 | 572 | 1,038 | 7.5% |
| 1889／98 | 54,589 | 378 | 847 | 8% |
| 1899／1908 | 51,884 | 286 | 711 | 6.4% |

(Bernays, SS. 5―8)

る。一八九〇年以前についてみると、一八六八年に労働者数一、二八五人、紡錘数が七六年に五八、八一七、織機が七一年に七三六台、織物製品が六八年に一四四、五六〇反、総販売額が八一年に五二〇万マルク、という最大値が記録されている。一八九〇年ではそれぞれ、一、〇〇〇人弱、五七、〇八〇錘、四三八台、五六、八九九反、四三〇万マルクであった。いずれの数値も一八九〇年の方が低いが、ただ考慮すべき点は、労働者一人当り機械資本が一八六八年の四三六ターラー（一、三〇八マルク）から九〇年の三、三九五マルクに上昇したことであって、ここに生産の機械化の進展がうかがえる。

**第4表**　調査対象年の生産規模（S．11）

| | 労働者数 | 綿糸（千ポンド） | 織物（反） | 精紡錘数 | 撚糸錘数 | 織機台数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1891 | 899 | 6,032 | 48,447 | 49,786 | 5,624 | 408 |
| 1900 | 776 | 5,032 | 31,005 | 44,627 | 6,782 | 224 |
| 1908 | 759 | 4,420 | 52,527 | 45,950 | 5,577 | 397 |

| | 建造物資本（マルク） | 機械資本（マルク） | 販売総額（マルク） |
|---|---|---|---|
| 1891 | 1,761,781 | 3,364,892 | 3,534,427 |
| 1900 | 1,768,479 | 3,721,502 | 4,324,513 |
| 1908 | 1,799,205 | 4,214,325 | 2,862,417 |

第四表は、ベルナイスの調査年である一八九一、一九〇〇、一九〇八の三つの年の生産規模を示したものである。いくつか付け加えておくと、一八九二年に労働時間が一一時間に短縮された。一九〇五年に二六六台のノースロップ織機が設置され、織物生産が著しく増大した。男女織布工は、一人で八―一二台を操作した。一九〇六年には自動ミュールが四八四錘機から八一六ないし九〇〇錘機へと大型化した。一八九四年に紡績工場、一九〇五年に織布工場が新設されている。

この会社は生産高、販売額ともそう上昇しているとは思われない。しかし保守的かつ慎重な経営と着実な生産合理化で、安定した発展をとげてきた企業のようである。(3)

ベルナイスの調査

調査は一九〇九年一月に行なわれたが、マリー・ベルナイスはその準備として、一九〇八年九月に工場に勤務し、繰返し工Spulerin として数週間働き、その後工場長に素姓を明かし、調査の便宜をはかってもらっている。調査報告は一九一〇年社会政策学会の雑誌に発表された。報告は、第一部「職業選択と職業運命」（第一編　年齢及び地理的出自による選択、第二編職業的出自による選択と生活運命）第二部「繊維工業労働の心理物理学」、という構成であるが、第一部第一編は一八九一年、一九〇〇年、一九〇八年の労働者に関する客観的データ、あと

は一九〇九年一月に行なったアンケート調査の結果を資料としている。ベルナイスのものをも含めたこの時の学会の調査報告は、労働力を経営内職種別に数的をおさえている点に限っても、今も資料的価値を失っていない。(4)

三つの年の労働者について調査された項目は、性、年齢、職種、各年の入社の月、入社時の年齢、出生地（その人口及びM・グラートバッハからの距離）、宗派である。一九〇九年の質問表では、父の職業、祖父（父方）の職業、父の出生地（＝祖父の居住地）とM・グラートバッハからの距離、職業選択の理由、勤務先・居住地・職業（職種）の変更回数、勤務先・職種の変更理由、この工場での就業期間、本人及び父の兵役検査の合否（男子）、住居形態、未婚・既婚の別、後者の結婚年齢、子供の数、幼児死亡数、息子の職業、休日の過ごし方、許されるならば就いてみたい職業（男子）、工場に留まりたいか、他に何かやりたいか（女子）、が尋ねられた。第二部の資料としてはさらに、出来高賃の賃銀高とその変動（季節・週・日の変化）、子供時代の居住地 Kindheitsort の人口、疲労感、「緊張」感の有無、向上意欲のデータが得られて利用されている。(5)

(1) Bernays, *a.a.o.*, SS. 3-13. 以下ベルナイスのこの本については、S.……で示す。

(2) S.5、渡辺「……分析」三九ページも参照せよ。

(3) S. 10. (Brief M. Webers an M. Bernays)

(4) 例えば Gerhard Adelmann, Die berufliche Aus-und Weiterbildung in der deutschen Wirtschaft 1871-1918, in *Zeitschrift für Unternehmensgeschichte*, Beiheft 15, 1979, z. B. S.22.

(5) ベルナイスは、このグラートバッハ紡織会社の調査の他に、あと二つの調査報告を行なっている。Untersuchungen über die Schwankungen der Arbeitsintensität während der Arbeitswoche und während des Arbeitstages. Ein Beitrag zur Psychophysik der Textilarbeit (*S. d. V. f. S.*, 135. Bd. 3. Teil), Leipzig 1912. (Bannwollspinnerei Speyer での調査）及び Oberrheinische Bannwollspinnerei での調査（*S. d. V. f. S.*, 138. Bd. SS. 139-146) である。加えて彼女は、この社会政策学会の調査報告の全体をまとめたものを書いている。Berufswahl und Berufsschicksal des modernen Industriearbeiters, in *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 35 (1912), Bd. 36 (1913). ここにうかがえるように、ベルナイスは、M・ヴェーバーがその方法論を書き、自ら調査も行なった「心理物理学」の研究を、いわば「直系」として受け継いだ。

本稿では、賃銀高の変動と諸要因の関連を探るこの「心理物理学」の問題（報告第二部）には立ち入れない。一言付せば、ベルナイスの場合、ヴェーバーにあった方法論深化への関心（一九〇七年のR・シュタムラー批判論文、さらに『工業労働調査論』（日本労働協会）一九七五年、訳者鼓氏の「解説――マックス・ヴェーバーの労働調査論について――」を見よ）が希薄であるようだ。

S. *d. V. f. S.*, 133. Bd. については、Ervin Szabó の紹介記事がある。*Archiv f. Sw. u. Sp.*, Bd. 34, SS. 646-652.

## 二　調査結果の検討

### 工場内労働力構成——工程と職種

この工場の作業工程及び一八九一年、一九〇〇年、一九〇八年の就業者数をみることで、労働力構成の概観が得られる。

男子　1、手工業者は機械の保守、建物の営繕等にあたり、錠前工、木材・金属職人、れんが工等が含まれる。[1] 2、職長は労働者の作業成果の監督を行なう。この1・2が工場内「貴族」層をなし、二週間の賃銀が平均で四五—五五マルクである。3、織布工と4、紡績工は熟練工 gelernt で、出来高賃銀であり、平均では二週間で四〇—五〇マルク、多い者で四五—五五マルクになる。紡績工は、自動紡績機 Selfactor を扱い、補助作業をする見習期間中の者もいるが、[2] 統計では一括される。5、不熟練機械作業工は、混綿、打綿、梳綿等を行なう者、6、不熟練非機械作業工は、繊維に直接かかわらない包装や木管運搬、雑役に従

の年齢構成（S. 23 f）

| 31—40歳 | | | 41—50歳 | | | 51—60歳 | | | 60歳以上 | | | 合計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1891 | 1900 | 1908 | 1891 | 1900 | 1908 | 1891 | 1900 | 1908 | 1891 | 1900 | 1908 | 1891 | 1900 | 1908 |
| 7 | 7 | 13 | 9 | 8 | 6 | 2 | 7 | 8 | 6 | 3 | 1 | 45 | 49 | 48 |
| 4 | 10 | 9 | 9 | 3 | 7 | 5 | 5 | 2 | 1 | 7 | 8 | 23 | 25 | 30 |
| 32 | 21 | 18 | 16 | 23 | 15 | 17 | 8 | 7 | 0 | 3 | 3 | 203 | 113 | 115 |
| 17 | 15 | 13 | 3 | 11 | 10 | 0 | 3 | 5 | 0 | 0 | 0 | 161 | 109 | 99 |
| 6 | 1 | 1 | 5 | 2 | 3 | 2 | 4 | 4 | 2 | 0 | 1 | 21 | 9 | 25 |
| 17 | 15 | 11 | 14 | 16 | 14 | 14 | 11 | 10 | 3 | 3 | 3 | 110 | 130 | 127 |
| 19 | 26 | 18 | 17 | 21 | 25 | 9 | 11 | 19 | 6 | 10 | 5 | 89 | 127 | 124 |
| 102 | 95 | 83 | 73 | 84 | 80 | 49 | 49 | 55 | 18 | 26 | 21 | 652 | 562 | 568 |
| 10 | 3 | 4 | 10 | 7 | 3 | 1 | 3 | 5 | 0 | 0 | 0 | 115 | 46 | 54 |
| 9 | 16 | 14 | 1 | 3 | 7 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 123 | 177 | 221 |
| 26 | 13 | 30 | 4 | 13 | 8 | 0 | 1 | 6 | 0 | 0 | 1 | 141 | 135 | 156 |
| 8 | 13 | 11 | 3 | 2 | 5 | 5 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 140 | 173 | 124 |
| — | — | 3 | — | — | 0 | — | — | 0 | — | — | 0 | — | — | 28 |
| 9 | 6 | 4 | 2 | 2 | 3 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 54 | 61 | 44 |
| 0 | 5 | 5 | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 27 | 37 | 37 |
| 5 | 6 | 14 | 2 | 3 | 7 | 2 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 59 | 89 | 116 |
| 4 | 2 | 9 | 5 | 4 | 10 | 3 | 1 | 6 | 2 | 1 | 1 | 26 | 20 | 41 |
| 71 | 64 | 94 | 27 | 35 | 44 | 14 | 10 | 24 | 2 | 1 | 2 | 676 | 738 | 821 |

事する者、7、織布補助作業工は、糊付、けば取り、検査等に従事する者で、以上の不熟練 ungelernt 三種は日給であり、平均で二週間に成年が三〇—四〇マルク、若年が二〇—三〇マルクを得ている。

女子　熟練工とされるのは、1、織布工、2、精紡工（男子の紡績工に対応、リング紡績機を扱う）、3、粗績工の三種である。いずれも出来高賃銀で、二週間で織布工が平均三五—四〇マルク（最高クラスは四〇—四五マルク）、紡績工両種が二五—三〇マルク（同三五—四〇マルク）を得ている。一六歳までの見習期間にある者は平均一・二〇—二・〇〇マルクの日給が支払われる。統計では男子同様本工と一括される。未熟練工 angelernte は、比較的短期の訓練期間を要する四種がある。いずれも出来高賃銀で、平均して二五—三〇マルク（同三〇—三五マルク）、訓練期間には最高で二—二・二〇マルクの日給が支払われる。4、練条工は梳綿機にかけられた綿を粗

**第5表　労働者全数**

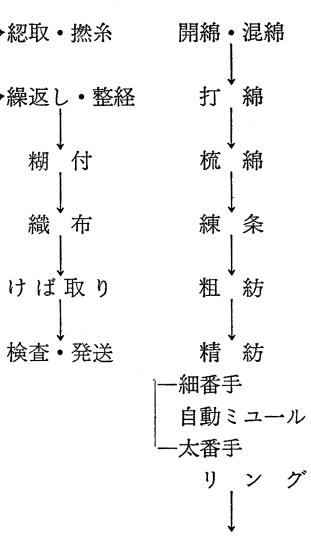
| | 14—16歳 | | | 17—21歳 | | | 22—30歳 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1891 | 1900 | 1908 | 1891 | 1900 | 1908 | 1891 | 1900 | 1908 |
| 手工業者 | 0 | 5 | 3 | 11 | 9 | 6 | 10 | 10 | 11 |
| 職長 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 4 |
| 織布工 | 33 | 9 | 11 | 69 | 21 | 36 | 36 | 28 | 25 |
| 紡績工 | 40 | 23 | 16 | 65 | 39 | 37 | 36 | 18 | 18 |
| 織布補助工 | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 | 7 | 4 | 0 | 8 |
| 不熟練機械作業工 | 1 | 8 | 10 | 29 | 45 | 47 | 32 | 32 | 32 |
| 不熟練非機械作業工 | 10 | 10 | 19 | 10 | 22 | 22 | 18 | 27 | 16 |
| 全男子 | 85 | 55 | 60 | 185 | 138 | 155 | 140 | 115 | 114 |
| 織布工 | 37 | 6 | 5 | 34 | 14 | 20 | 23 | 13 | 17 |
| リング紡績工 | 22 | 26 | 69 | 50 | 67 | 76 | 41 | 65 | 53 |
| 粗紡工 | 6 | 3 | 7 | 36 | 32 | 52 | 69 | 73 | 52 |
| 綛取工* | 18 | 30 | 36 | 57 | 82 | 35 | 49 | 45 | 34 |
| クロス繰返し工 | — | — | 2 | — | — | 11 | — | — | 12 |
| 繰返し工 | 2 | 4 | 6 | 20 | 17 | 15 | 20 | 31 | 15 |
| 撚糸工 | 2 | 1 | 1 | 11 | 17 | 15 | 12 | 12 | 14 |
| 練条工 | 1 | 0 | 0 | 12 | 27 | 43 | 28 | 51 | 51 |
| 不熟練工 | 3 | 4 | 3 | 6 | 4 | 5 | 3 | 4 | 7 |
| 全女子 | 81 | 74 | 129 | 226 | 260 | 272 | 245 | 294 | 255 |

* 1908年に不明者1あり。

紡機にかけられる程度の篠にする練条機を扱う。訓練期間は数日で済む。5、繰返し工は糸をスピンドルから織機の経糸用リールに繰る作業を行ない、四―六週間の訓練期間が必要である。6、撚糸工の扱う機械はリング紡績機に似ているが、スピンドルの回転数が紡績機の七、五〇〇回／分に比して四～五、〇〇〇回／分と少なく、糸も切れにくい。訓練期間は四週間程度である。7、綛取り工は、撚糸にされなかった糸を出荷できる綛の形にする作業を行なう。手の作業が多く、こつと器用さが必要とされ、訓練期間も六―八週間位とらないと日給を上まわる出来高賃が稼げない。8、補助労働者[3]と9、掃除婦は不熟練であり、賃銀は日給、二週間で二〇―三〇マルクの間である。

以上の男子七種、女子九種[4]という編成は、三つの調査年を通じて原則的に変化していない。

作業工程






## 年齢構成[5]

当該年に工場で少しでも働き、従って第5表で数えられている全労働者中、約七割が三〇歳以下、女子のみでは約八割が三〇歳以下である。女子に若年層が多い。全体では一七―二一歳が三割強、二二―三〇歳が三割弱、三一―四〇歳が約一二％を占め、これが労働者層の中軸をなす。この一七年の間に四一―五〇歳が七・五→八・九％[6]、五一―六〇歳が四・七→五・七％とやや増加したが、高齢労働者の勤続によると思われる。だが総じて大きな年齢構成上の変化のないことは、この工業の技術的諸条件に依るところが大きいと考えてよかろう。しかし上記の全体的な数値は職種別の検討を経なければ平板な数値に留まる。(以下、第6表参照)

男子　まず紡績工と織布工を比較してみよう。どちらも中心をなすのは一七―三〇歳で、ここに半数以上が集まり、その前後の年齢層がそれにつづく。ただ紡績工の方がより若年クラスに多く分布していることが読みとれる。一四―二一歳でそれぞれ五三・六％と四〇・九％、四一歳以上で一五・二％と二一・七％という差が出ている。次に不熟練機械作業工では、三〇歳以下が五六・二→六五・四→七〇・一％と増大し、四一歳以上が二八・二→二三・一→二一・三％と減少した。同じ不熟練でも非機械作業工では、三〇歳以上が四二・七→四六・五→四六・〇％と大きな変化は見られない。不熟練グループでも、機械にたずさわる職種では、熟練工の年齢構成にわずかながら接近

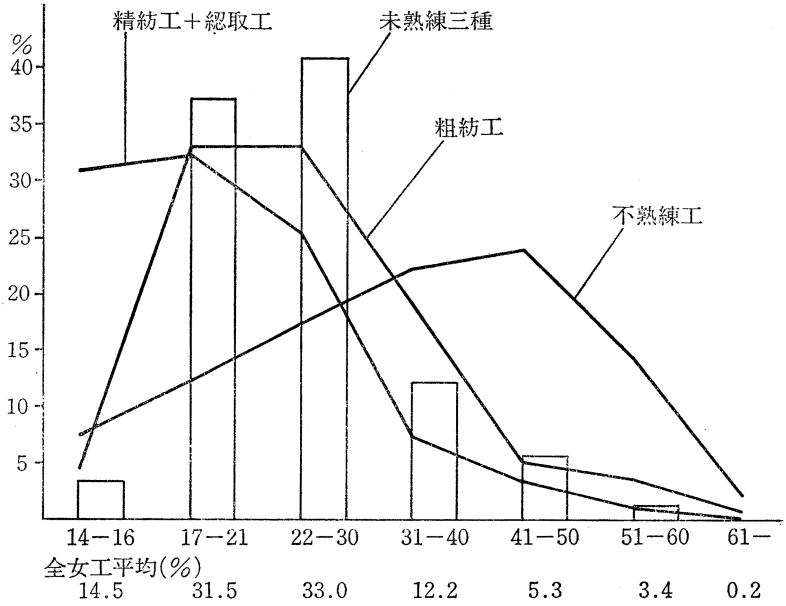
**第6表** 1908年の年齢構成（%）

| 職種＼年齢 | 14—16 | 17—21 | 22—30 | 31—40 | 41—50 | 51—60 | 60歳以上 | 計（人数） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 手工業者 | 6.3 | 12.5 | 22.9 | 27.1 | 12.5 | 16.7 | 2.1 | 48 |
| 織布工 | 9.6 | 31.3 | 21.7 | 15.7 | 13.0 | 6.1 | 2.6 | 115 |
| 紡績工 | 16.2 | 37.4 | 18.2 | 13.1 | 10.1 | 5.1 | 0 | 99 |
| 全男子 | 10.6 | 27.3 | 20.1 | 14.6 | 14.1 | 9.7 | 3.7 | 568 |
| 全男子(残数) | 12.0 | 21.6 | 17.0 | 14.0 | 18.7 | 11.7 | 5.0 | 342 |

**第7表** 女子織布工の年齢構成変化（%）

| | 14—16 | 17—21 | 22—30 | 31—40 | 41—50 | 51—60 | 全数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1890年 | 32.2 | 29.6 | 20.0 | 8.7 | 8.7 | 0.9 | 115 |
| 1908年 | 9.3 | 37.0 | 31.5 | 7.4 | 5.6 | 9.3 | 54 |

**第1図** 1908年女子職種別年齢構成



している（若年化）ことがみれらる。職長は、若年では勤まらず、また信用のある人物ならば高齢でも勤めつづけられるので、独特な年齢構成となる。三一―五〇歳が半数以上、二〇歳代に若干名、あとは五一歳以上、という具合である。

女子　女子全体の年齢構成に近い職種は未熟練工（繰返工・撚糸工・練条工）であり、これを中心に高齢に偏倚する粗紡工と不熟練工、及び若年に偏倚する精紡工と綛取工があって、一定の差を示している。若年層の多い後者二職種では、一八九〇年から一九〇八年にかけて、この低齢化が急速に進んだ。精紡工では一四―一六歳が一七・九↓三一・二％、一七―二一歳が四〇・七↓三四・四％、綛取工ではそれぞれ一二・九↓二九・〇％、四〇・七↓二八・二％と、著しいものがある。織布工はやや例外的な変化を示した。一八九〇年では最も若い労働者が多く、丁度一九〇八年の精紡工・綛取工のカーブに類似していたが、高齢化傾向がみられ、一九〇八年（全数は五四に減少）では、むしろ粗紡工に近いカーブを描いている。(7)

## 地理的出自

### 1　出生地とM・グラートバッハの遠近

ここでは労働者の出生地とM・グラートバッハの距離ないし出生地の位置という観点から、この工場への労働力の供給源を検討する。

距離については、半径一〇キロメートル以内＝第1圏、三〇キロ以内＝第2圏、一〇〇キロ以内＝第3圏、四〇〇キロ以内＝第4圏、それ以遠のドイツ＝東エルベ、及び外国（距離ではない）の六圏区分がなされている。また、あわせて行政単位での区分（M・グラートバッハ市、グラートバッハ郡、デュッセルドルフ県、ライン州、プロイセン邦、ドイツ帝国、オランダ、他の外国）(8)も調べられている。

はじめに労働者層全体の様子及び一八九一↓一九〇八年の変化をみておこう。

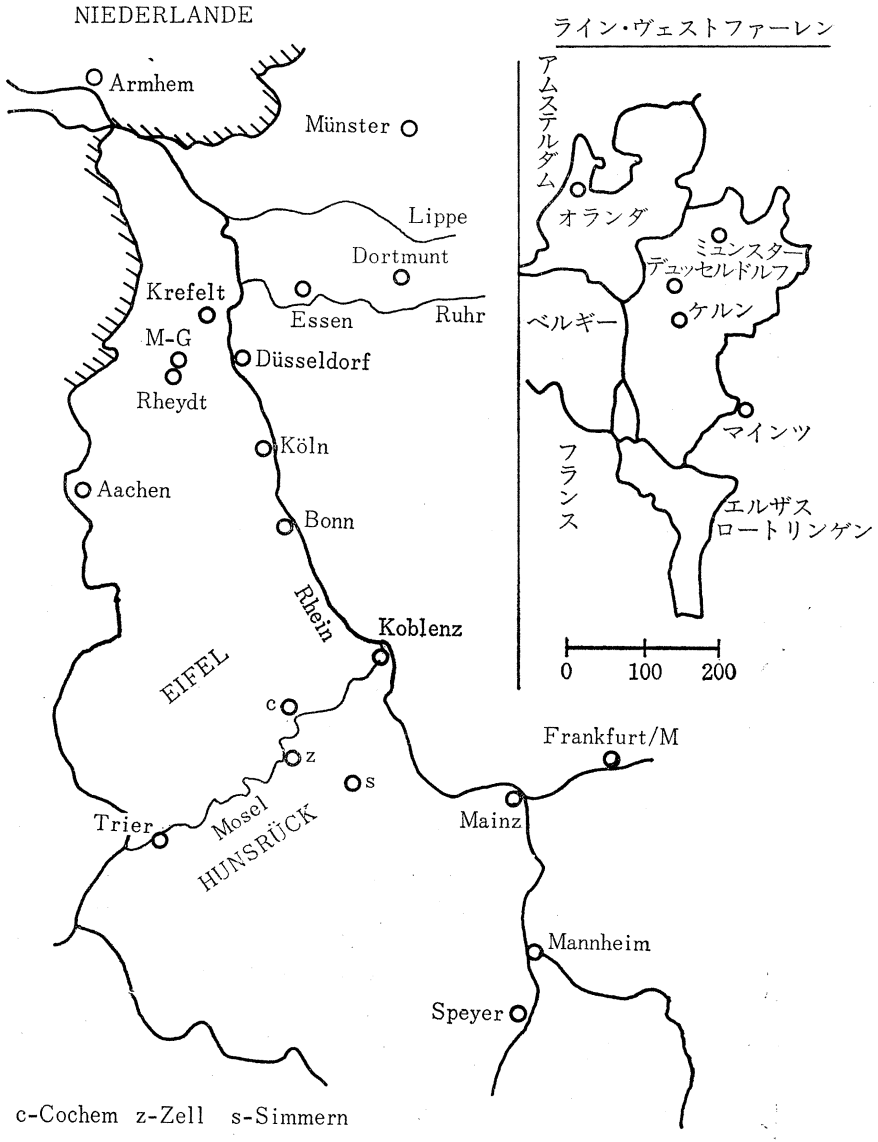
1、最大の供給源は第1圏（全労働者の五七・三↓五五・九％）である。ただ細かくみると、その中でもM・グラートバッハ市四一・九↓三八・六％、郡が一五・三↓一七・三％というわずかな変化はある。

2、第二の供給源は第2圏で、ライン河左岸の工業地帯が含まれ、一三・九↓一六・三％とやや増加している。

3、第4圏（一二・八↓一二・〇％）が第3圏（一一・二↓八・九％）を上まわっている。しかも第四圏のうちでも一〇〇―一五〇キロに集中しており、主にモーゼル川の南北フンスリュック及びアイフェルの出身者が多い。さらにその中でも三つの郡 Landkreis (Zell, Kochem, Simmern) の出身者は一〇六↓一一七↓七八人を数えている。

4、遠隔地出身者は少ない。シュレジェン・ポーゼン・東西プロイセン州からは二八↓二四人にとどまる。近くの外国オランダからは一七↓四三↓六三人（三・八％）と増加し、一定の比率を占めている。

第2図　München=Gladbach の位置




c-Cochem　z-Zell　s-Simmern

5、第3圏、とくにライン州出身者（デュッセルドルフ県以外）の減少（二四・四→一七・九％）が目につく。

6、以上の変化はあれ、一八九一→一九〇八年と、それほど大きな変化はここではなかった、と言えよう。

次にいくつかの職種をとりあげてみよう。

男子　手工業者・職長は、ずっと第1・2圏が七～八割を占めて局地的リクルートであることが明瞭である。紡績工は第1圏が六五・二→七二・七％、第2圏が一二・四→六・一％と、リクルートの著しい局地化をみせた。外国人は四・九→九・一％と増している。逆に織布工は第1圏が四八・二→三八・三％、第2圏が一二・二→一三％、第4圏が一二・四→一五・五％と、むしろ軽い拡散化をみせている。また外国人、特にオランダ人が八→一九人（一六・五％）と増えている。男子全体では、やはりライン左岸（第1・2圏）がずっと約七割を占めてきた。第4圏のうち約半数がアイフェル・フンスリュック出身とのことである。

女子　女子の場合、M・グラートバッハとアイフェル・フンスリュックが二つの中心的労働力供給源をなす。熟練工グループは局地的リクルートといえる。精紡工はその典型であり、第1圏が七〇・七→七四・二％、第4圏が一二・九→五・四％という局地化を示し、男子紡績工と似たリクルートを行なっている。これに対して織布工もやはり男子織布工に似た供給源比率をもつが、相違点は外国人（四・八→一一・一％）がオランダ

**第8表　地理的出自**

| 1908年（％） | 1 | 2 | 3 | 4 | 東エルベ | 外国 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 手工業者 | 66.7 | 16.7 | 10.4 | 2.1 | 2.1 | 2.1 |
| 職長 | 60.0 | 13.3 | 16.7 | 10.0 | 0 | 0 |
| 織布工[1] | 38.3 | 13.0 | 11.3 | 15.7 | 3.5 | 20.0 |
| 紡績工[2] | 72.2 | 6.1 | 3.0 | 8.1 | 0 | 9.1 |
| 全男子[3] | 54.8 | 15.8 | 10.0 | 9.0 | 2.1 | 7.9 |
| 織布工 | 53.7 | 11.1 | 3.7 | 14.8 | 5.6 | 11.1 |
| 精紡工 | 74.2 | 12.7 | 3.6 | 5.4 | 1.8 | 2.7 |
| 撚糸工 | 35.1 | 2.7 | 13.5 | 40.5 | 2.7 | 5.4 |
| 不熟練工 | 43.9 | 14.6 | 12.2 | 24.4 | 4.9 | 0 |
| 全女子[3] | 56.8 | 11.4 | 8.0 | 16.4 | 2.4 | 4.4 |

1）全数115に対し，101.8％＝117人となり，どこかにミスがある。
2）計99％＝98人となる。
3）結果的にベルナイスの計算と0.1％以下の差しか出ない。

人よりもむしろベーメン・オーストリア人だということである。未熟練工のうち綛取工は熟練工に近く、第1圏が五六→六四%と増加、ライン州の比率が二七・一→一五・三%と低下した。以上の職種では、地元がリクルート源としてはライン州南部を侵食していることがうかがえる。しかし他の未熟練及び不熟練工の職種では、むしろライン州南部出身者の比率が高まっているものもある。撚糸工では第1圏で五五・五→三五・一%と減少、第4圏で一八・五→四〇・五%と増加した。練条工もそれに近い変化をみせた。不熟練工ではM・グラードバッハが五三・八→二一・九%と減り、第2・3・4圏が増えて、供給地の拡散化傾向を示している。女の場合大きくみると、熟練三種と未熟練二種（綛取工・クロス繰返し工）の五職種は局地的リクルートを行ない、残りの未熟練三種と不熟練の計四職種は、地元と並んで、アイフェル・フンスリュック地方を中心とした州内遠隔地リクルートを行なう、という二つのグループに分かれるようである。

2　出生地人口規模別

つぎに労働者を、その出生地の人口規模別に分類してみよう。これに依る方が、前項の遠近分類よりも職種間の相違や変化をはっきり示すことができる。分類は、人口が一―一、〇〇〇人の村（Dorf）、千―五千人の農村都市（Landstadt, ここでは町と呼んでおく）、五千―五万人の小都市（Kleinstadt）、五万―一〇万人の中都市（Mittelstadt）、一〇万人以上の大都市（Großstadt）の五区分で行なわれる。

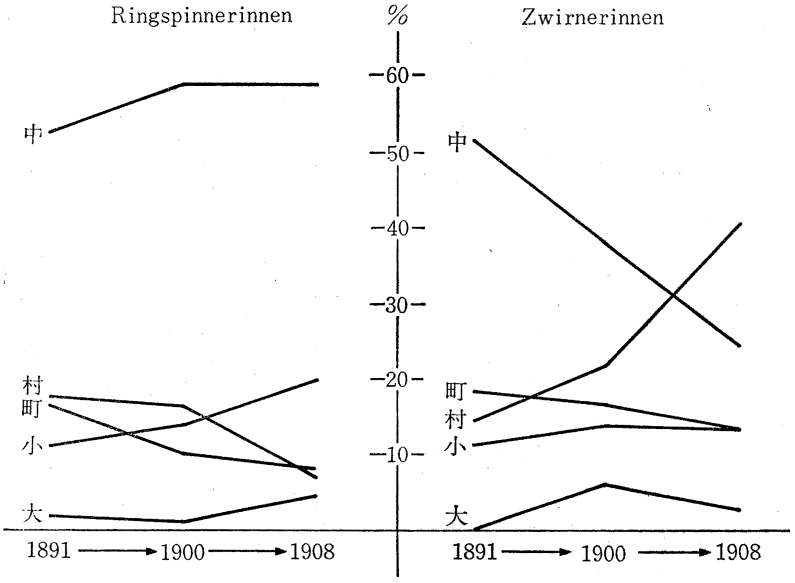
前項にて重要な意義をもっていた地元のM・グラートバッハの人口は、一八九五年に五三、六六二人、一九〇五年に六〇、七〇九人、一九〇九年に六五、七六八人と、一貫して中都市に入る。中都市出身者は、全労働者の四二→三八・二→三九・七%と常に首位を占めてきた。村は二〇・一→一七・九%、町も二二・五→一四・一%と減少し、かわって小都市が一一・九→一八・九%と伸びた。大都市は一・〇→三・九%と常に最下位であった。

男子　男子労働者のひとつの典型は紡績工である。中都市が四五・九→四四・四%と首位を占め、村＋町が三四・七→一四・二%と激減し、小都市が一三・五→三〇・三%と第二位になった。織布工では中都市が三分の一前後を占めて首位は変わらないが、村＋町も、四六・二→三一・三%と減少しつつもその相対的意義を保っている。小都市は一一・〇→一一・三%と変化がない。不熟練機械作業工では村・町の減少、小・中都市の増加がみられ、同非機械作業工では、中都市の減少、村・町・小都市の増加が認められはするが、明確な傾向と見ることはできない。手工業者は（一九〇八年で）中都市五四・二%、町二二・九%と例外的な分布である。村・町から小・中都市へ、という傾向が妥当するのは機械作業労働者で、とくに技術を要する紡績工で著しい。不熟練工の出生地の遠近・人口の大小には、それほど明瞭な規則性を見るのは困難である。

**第9表**　出生地人口規模別分類

| 1908年（%） | 村 | 町 | 小都市 | 中都市 | 大都市 | 全　数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 織　布　工 | 14.8 | 16.5 | 11.3 | 32.2 | 5.2 | 115 |
| 紡　績　工 | 6.1 | 8.1 | 30.3 | 44.4 | 2.0 | 99 |
| 不熟練機械工 | 15.0 | 13.4 | 33.1 | 28.3 | 2.4 | 127 |
| 同非機械工 | 23.4 | 25.8 | 16.1 | 28.2 | 4.0 | 124 |
| 全　男　子 | 15.0 | 16.3 | 22.5 | 34.5 | 3.1 | 568 |
| 織　布　工 | 22.2 | 14.8 | 5.6 | 40.7 | 3.7 | 54 |
| 綛　取　工 | 17.7 | 9.7 | 11.3 | 55.6 | 3.2 | 124 |
| 繰　返　し　工 | 40.9 | 9.1 | 11.4 | 25.0 | 6.8 | 44 |
| 練　条　工 | 33.6 | 19.8 | 15.5 | 15.5 | 6.0 | 116 |
| 全　女　子 | 18.9 | 12.7 | 16.5 | 43.8 | 4.2 | 821 |
| 計 | 17.9 | 14.1 | 18.9 | 39.7 | 3.9 | 1,389 |

**第3図**　人口規模別出生地の変化



女子　村・町減少、小・中都市増加の傾向は織布工以外の熟練工と綛取工に顕著に示される。職種別の変化は、前項の出生地の遠近の検討で得られた像と一致する。典型的な精紡工では中都市がずっと半数を越えており、村＋町が三三・四→一四・五％へ、小都市が一〇・六→一九・五％へと大きく変化した。逆の代表例として撚糸工をみると、中都市の減少は著しく、町はやや減少したものの村が大きく増加した。未熟練工では村＋町の出生者が半数を越えている。ただし綛取工は、出生地からみる限り、未熟練工よりも熟練工により近い存在であることがはっきりと示されている。(9)

社会的出自

1　父親の職業

ここでは、労働者の父親の職業を七つに分けて、それをもって労働者の出身社会層とし、簡単な分析を試みる。七区分とは、A＝繊維工業労働者、B＝（その他の）工場労働者、C＝手工業者、D＝農民、E＝土木建設労働者、F＝他のヨリ上層の職業、G＝他のヨリ下層の職業である。(10)

第10表　父の職業別分類（1909年アンケート）

| 職種＼出自 | A | B | C | D | E | F | G | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 手工業者 | 6 | 6 | 15 | 5 | 1 | 4 | 2 | 39 |
| 職長 | 3 | 1 | 5 | 3 | 0 | 4 | 1 | 17 |
| 織布工 | 26 | 14 | 7 | 6 | 5 | 7 | 4 | 69 |
| 紡績工 | 18 | 12 | 12 | 6 | 4 | 3 | 3 | 58 |
| 織布補助 | 3 | 4 | 4 | 2 | 3 | 1 | 5 | 22 |
| 不熟練機械工 | 16 | 5 | 8 | 8 | 4 | 2 | 7 | 50 |
| 不熟練非機械工 | 11 | 6 | 10 | 14 | 6 | 2 | 12 | 61 |
| 全男子 | 83 | 48 | 61 | 44 | 23 | 23 | 34 | 316 |
| 女子織布工 | 11 | 6 | 0 | 3 | 1 | 5 | 4 | 30 |
| 精紡工 | 23 | 27 | 15 | 5 | 10 | 0 | 33 | 113 |
| 粗紡工 | 21 | 11 | 10 | 17 | 6 | 4 | 11 | 80 |
| 綛取工 | 18 | 10 | 3 | 5 | 3 | 14 | 9 | 62 |
| クロス繰返し工 | 2 | 3 | 3 | 2 | 0 | 4 | 2 | 16 |
| 繰返し工 | 1 | 3 | 1 | 7 | 1 | 1 | 1 | 15 |
| 撚糸工 | 3 | 2 | 1 | 5 | 0 | 0 | 5 | 16 |
| 練条工 | 6 | 4 | 2 | 7 | 2 | 0 | 8 | 29 |
| 不熟練工 | 6 | 1 | 4 | 10 | 0 | 0 | 5 | 26 |
| 全女子 | 91 | 67 | 39 | 61 | 23 | 28 | 78 | 387 |
| 計 | 174 | 115 | 100 | 105 | 46 | 51 | 112 | 703 |

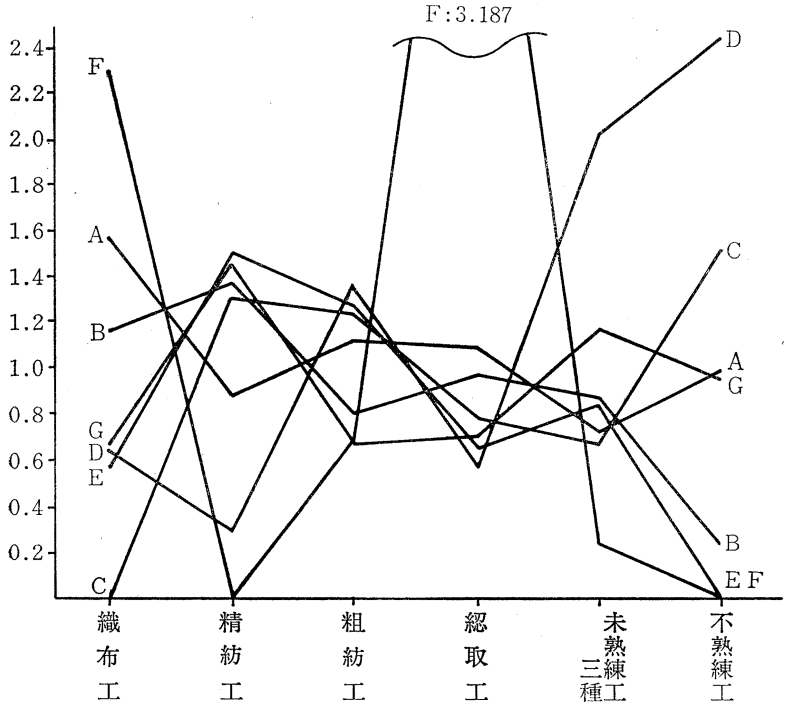
A・Bと答えたものはプロレタリア家族出身とみなされる。AをBとあえて分けたのは、子が親と同じ職業に就く傾向をどの程度示すかに注目するからである。C・Dは、いわば「伝統的」な、「自立的」な職業である。その子供の職種から、プロレタリア化の傾向の程度が示される。Fはその職業に予備教育が必要なもの、また社会的に高い地位と考えられている職を含む。上級職長、曹長、役僧、教師、徴税官、旅館・料理屋主人、商人、事務員等が挙がっている。Gには、きこり、くず屋、籠製造人、馬丁、荷馬車の御者、夜警、墓堀り等がみれらた。なお、アンケート対象者七二〇人中、八九人の父親がこの同じ工場に勤務していた。(11)

全体では、親と同じ職（A）に就いた者が多く二四・六%あり、また工場労働者家族出身者（A＋B）が二八九名で四一%にものぼる。「伝統的」（C＋D）職業の出身者が二〇五名で二九%となる。GはBとほぼ同数あり、EとFが少ない。

男子　男子ではA出身者が八三名と一番

別就業職種特化

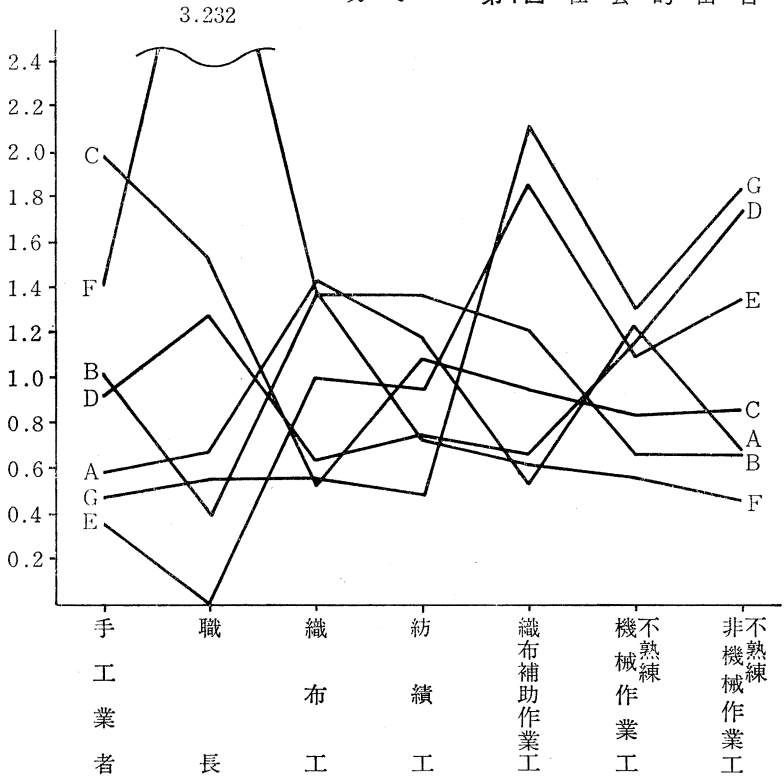
女子



多く（二五・九％）、次にCの六一人＝一九％が続く、C出身者の中でも工場で手工業者として働く者が一五名もあり、全手工業者の四割近くも占めている。特化指数は一・九九を示す。[12] 熟練工（織布工と紡績工）では、A・B出自の者への偏よりがあげられよう。このことは、工場労働者の子弟が出来高賃銀労働者となる傾向が強い、とも表現できる。信頼・ある程度の知性という資質が要求される職長ではFとCが多く、Dも指数1を越えている。不熟練工グループではG、E、次いでDも多い。

女子　全体ではAが多く九一人＝二三・五％、次にGの七八人、そのあとB六七人とD六一人が続いている。男子と大きく異なるのは、Cが三九人＝一〇％と少なく、Gが二〇％と多いことである。さらに熟練工グループでAとBが比較的多いのは男子と同じであるが、それほど明瞭な姿をとらない。興味深いことに、織布工で特化指数が1以上を示すのがF、A、Bであるのに対して、精紡工での1以上はE、G、B、Cとなり、この二職種が出自の観点からは

男子　**第4図**　社会的出自



対蹠的な型をとっている。未・不熟練工グループではDが多い。これは既にみた地理的出自で示唆されたように、ライン州南部の農村出身者がここに集まっている、と見てよかろう。綛取工（クロス繰返工をここに含めてある）では圧倒的にF（一八人＝二三％）に偏よっている。F出身者には、工場勤務の親方などの娘が多く、親たちは娘を工場に出すのなら、良い条件で清潔な作業をさせたいと考えて、娘をこの職種に就かせようとする、という。(13)

2　祖父（父方）の職業

男子　祖父の職業では、農民、工場労働者、手工業者の順に多く、（父の職業と区別するため小文字で表記すると）a＋b：c＋d＝九九：一四五で、父の世代での一三一：一〇五とは逆転している。祖父→父の職業組み合わせで二〇を越えるのはa→A五三、d→D三九、c→C三八、d→C二一の四種、十を越えるのがb→B一六、g→G一三、f→F一一、a→B、c→B、d→Gが一〇で、計六種ある。三世代の変化をみるならば、a→A→出来高賃銀労働者が二五、a→A→不熟種工が二三と多く、繊維工場労働者の一定の「世襲」状況が示される。c・d出身の一四五名は「伝統的」「自立的」職業から工場労働者へ、というプロレタリア化を示すものであり、d→D→不熟練工の二一名などその典型であろう。しかしその中でもc→C→工場手工業者が九名もいることは、この職業の世襲性向の強さを示している。

女子　女子労働者の場合、祖父の職業を知らないという回答が四六％にものぼっている。これをどう理解するかはともかく、cの一〇・八％、dの二二・四％が高い比率として目をひく。このことから逆に、祖父の職業を回答しえた女子労働者が「伝統的」な生活圏の出身者であるということは、彼女たちのひとつの特質を示すもの(14)と受けとめてよかろう。

第11表　祖父の職業

| | | 祖父の職業 | 父の職業 |
|---|---|---|---|
| 男子 | A | 74 | 83 |
| | B | 25 | 48 |
| | C | 53 | 61 |
| | D | 92 | 44 |
| | E | 11 | 23 |
| | F | 22 | 23 |
| | G | 39 | 34 |
| 計 | | 316 | 316 |
| 女子 | A | 26 | 91 |
| | B | 14 | 67 |
| | C | 42 | 39 |
| | D | 87 | 61 |
| | E | 3 | 23 |
| | F | 19 | 28 |
| | G | 18 | 78 |
| | 知らない | 180 | （？） |
| 計 | | 389 | 387 |

両親の地理的出自

労働者の地理的出自（出世地）と父母のそれとを比較することで、労働力の世代的な移動傾向の一端がうかがえる。

距離でみると、現在の労働者は第1圏でのみ、父母よりも明らかに高い比率を示し、第3・4圏では逆に低くなっている。この点は行政単位別でみると分かりやすい。M・グラートバッハ生まれの父が六九＝九・六％、母八八＝一二・二％に対し、同所生まれの現労

**第12表　労働者及び父母の出生地（1909年）**

| | 市内 | | 郡内 | | 県内 | | 州内 | | 邦内 | | 国内 | | オランダ | | 他の外国 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 父 | 母 | 父 | 母 | 父 | 母 | 父 | 母 | 父 | 母 | 父 | 母 | 父 | 母 | 父 | 母 | |
| 男子 | 28 | 36 | 49 | 49 | 53 | 56 | 106 | 85 | 17 | 25 | 8 | 10 | 20 | 16 | 6 | 4 | |
| 女子 | 41 | 52 | 53 | 41 | 52 | 55 | 138 | 135 | 24 | 19 | 6 | 7 | 14 | 21 | 1 | 2 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | 全体 |
| 本人男子 | 123 | | 46 | | 56 | | 52 | | 8 | | 11 | | 13 | | 6 | | 320 |
| 女子 | 199 | | 24 | | 65 | | 72 | | 8 | | 4 | | 11 | | 4 | | 400 |

**第13表　兵役検査**

| | 合 | 否 | 父合 | 父子合 | 父子否 | 父合子否 | 父否子合 | だない義務し |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 手工業者 | 11 | 19 | 17 | 7 | 9 | 10 | 4 | 6 |
| 職長 | 9 | 8 | 5 | 3 | 6 | 2 | 6 | — |
| 織布工 | 5 | 22 | 12 | 2 | 12 | 10 | 3 | 35 |
| 紡績工 | 4 | 25 | 9 | 1 | 17 | 8 | 3 | 27 |
| 織布補助 | 5 | 8 | 4 | 1 | 5 | 3 | 4 | 8 |
| 不熟練機械工 | 5 | 21 | 8 | 1 | 14 | 7 | 4 | 22 |
| 不熟練非機械工 | 15 | 29 | 16 | 6 | 19 | 10 | 9 | 15 |
| 計 | 54 | 132 | 71 | 21 | 82 | 50 | 33 | 113 |

働者は三二二人＝四四・七％とかなり高い値である。郡内では父一四・二％、母一二・五％に対し現労働者九・七％と減少しているが、男子一四・四％、女子六％という差がある。県内では微増であるが、ライン州内では父三三・九％、母三〇・六％であったのが、現労働者では男子一六・三％、女子一八％と減少している。

ここで言えることは、第一に、この労働者層は極めてラインラント色が強い、ということである。現労働者の平均年齢を二八歳とすれば、彼らは平均して一八八〇年生まれであり、一世代さかのぼって親はおよそ一八五〇年生まれと推測できる。親の代でもライン州内生まれが七割を越えているが、そうすると祖父の世代が多くは一九世紀中葉にはすでにライン州内で暮らしていたことになる。第二に、市内への集中がこの二世代間でみると極めて著しいというところに、工業都市の労働力吸引作用の強さが示されている。ライン州南部からM・グラートバッハへの大きな労働力の流れについては、これまでも繰り返し触れてきた。(15)

兵役検査

兵役検査の合否という観点からは、労働者層の一定の性格・体力の特性が明らかにされよう。ここで

は考察の対象が、アンケート回答者七二〇名中、プロイセン出身で兵役検査を受けた者に限られ、その数は一八六名である。

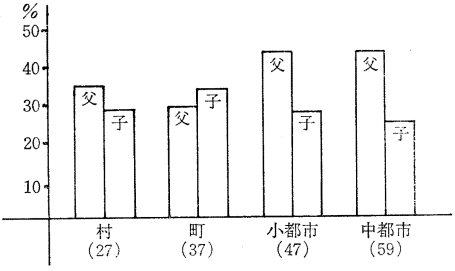
まず表から、兵役適性に関する世代間の差、職種間の差をみておこう。一八六名中五四名＝二九％が兵役検査で合格し、入隊して、退役したものである。父の世代の三八・二％よりも全体的に体位低下がいえそうである。

「貴族」層をなす手工業者・職長では、合格率四二・六％と平均をはるかに上回わる。とくに職長は五〇％を越える唯一の職種であり、父の世代よりも合格率の上昇がみられる。このことは、職長に必要な資質の一部――高い信頼度、時間厳守、規律、現状への忠誠心、等――にとって兵役が有利に作用する、と想像させる。織布工・紡績工では逆に合格率が一六・一％しかなく、しかも父の世代の三七・五％にも著しく劣っている。不熟練工は以上の二グループの中間に位置する。非機械作業工が前者に、機械作業工が後者に近い、という差は存在する。

調査対象数が少ないという問題は残るが、次のことが傾向としてここで言えるのではないか。繊維工業は、鉱山・鉄鋼等の業種とは違って、強い体力を必要としない。だからある家族内のひ弱な方の息子が繊維工業に就く、という選択が作用するであろう。織布工・紡績工の数値にこれが示されているように思われる。だからこのことは、身体的な「繊細さ」を選択要因としない手工業者や非機械作業工では妥当しないこととなる。

出生地人口規模別（現労働者の出生地のみ）の分類でみると、父世代から現在の労働者の合格率（全人数）は、村三五・一→二九・七％（三七）、町二九・七→三二・四％（三七）、小都市四二・六→二七・七％（四七）、中都市四二・四→二五・四％（五九）、大都市三三・三→五〇％（六）である。農村出身者の低下は、ひ弱な息子が繊維工場に出てくることをうかがわせる。中都市、つまりはM・グラートバッハでの著しい低下は、ひとつにはこの数十年間の都市の生活環境の悪化の反映とも考えられるが、もうひとつには、織布工・紡績工に中都市出身者が多い（前出）ことから、「繊細さ」の選択が働いていることも一要因と考えられる。

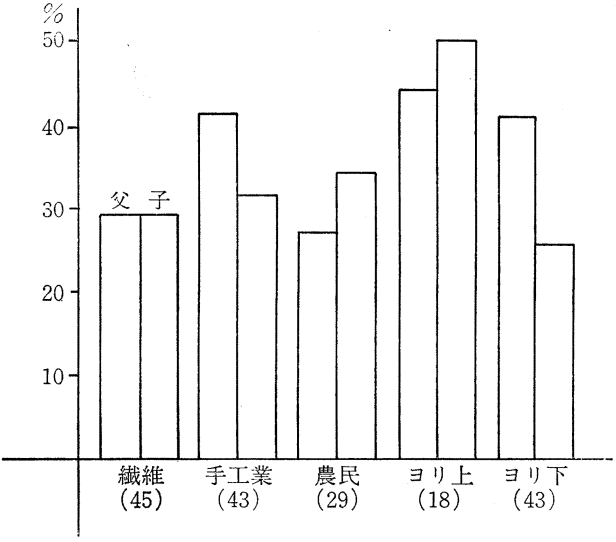
**第5図**　兵役検査合格率（出生地人口規模別）




最後に社会的出自と合格率の関係をみよう。第六図のグラフは、父の職業を繊維工場労働、手工業、農業、ヨリ上層、ヨリ下層（社会的出自の項の表示でいうとB・E・Gを含む）の五つに分け、父子両世代の合格率を示したものである。大まかに言えば、ヨリ上層の出身者が二分の一、伝統的職業出身者が三

分の一、プロレタリア家族出身者が四分の一強の合格者を出している。このことから、合格率はひとつには生活水準を反映しているのではないか、との予想が立てられる。まず、合格率の低い織布工でも、ヨリ上層出身者であれば合否が四名対一名と例外的な比率を示している。また、ヨリ上層では両世代とも高

**第6図　父の職業と兵役合格率**




い合格率であること、ヨリ下層で世代間隔差が大きいこと、さらに織維工場労働者ではそれがないこと、などが予想の根拠である。農民出身者では世代間で合格率が上昇しているが、その中でも織布工だと合否が〇対六名、手工業者＋不熟練工では一〇名対一一名と、ここでも農民の子弟の中でひ弱な者が「固有の」織維工業労働者へ、という選択は作用していることが読みとれる。

労働者のモビリティ(16)――入社・退社・残留――

第14表から、入・退社の全体像をはじめにつかんでおこう。入社率（入社数／全数）は三三・四→四九・四→五三・二％、退社率（退社数／全数）も三四・三→四三・二→四六・二％と上昇、従って残留率（残数／全数）は六五・七→五六・八→五三・八％と下降した。労働力の流動性が高くなってきたことが示される。とくに女子では一九〇八年の入社率が五七・九％、残留率が四九・三％と動きが激しく、不熟練の撚糸工、練糸工で顕著である。逆に安定性が高い（ここでは残留率の高いことをこう表現しておく）のは手工業者と職長の「貴族」層で、ほぼずっと八割を越えていた、

入社時の年齢は、男子では一七―二一歳が約三分の一、二二―三〇歳が約三割で大きな変化がなかった。三〇歳代が一〇・九→一三・六％、四一歳以上が一一・八→一二・九％とやや増えてはいるが、高齢者の入社はやはり少ない。機械制生産の作業工程が年齢による選択機能を発揮し、会社が労働者の最適配

**第14表　全数・入社数・残数**

| | 全数[1] | | | 入社数[2] | | | 年末残数[3] | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1891 | 1900 | 1908 | 1891 | 1900 | 1908 | 1891 | 1900 | 1908 |
| 手工業者 | 45 | 49 | 48 | 4 | 17 | 9 | 38 | 38 | 42 |
| 職長 | 23 | 25 | 30 | 1 | 1 | 4 | 20 | 24 | 26 |
| 織布工 | 203 | 113 | 115 | 109 | 75 | 68 | 104 | 58 | 62 |
| 紡績工 | 161 | 109 | 99 | 46 | 54 | 38 | 113 | 61 | 57 |
| 織布補助工 | 21 | 9 | 25 | 4 | 3 | 13 | 15 | 9 | 19 |
| 不熟練機械工 | 110 | 130 | 127 | 32 | 82 | 76 | 74 | 58 | 61 |
| 不熟練非機械工 | 89 | 127 | 124 | 24 | 55 | 56 | 63 | 72 | 75 |
| 織布工 | 115 | 46 | 54 | 55 | 23 | 25 | 68 | 30 | 29 |
| 精紡工 | 123 | 177 | 221 | 29 | 95 | 143 | 81 | 96 | 114 |
| 粗紡工 | 141 | 135 | 156 | 42 | 67 | 93 | 95 | 82 | 78 |
| 綛取工 | 141 | 173 | 123 | 44 | 62 | 70 | 96 | 111 | 71 |
| クロス繰返し工 | — | — | 28 | — | — | 13 | — | — | 15 |
| 繰返し工 | 54 | 61 | 44 | 23 | 32 | 16 | 37 | 36 | 23 |
| 撚糸工 | 27 | 37 | 37 | 7 | 21 | 21 | 18 | 18 | 17 |
| 練条工 | 50 | 89 | 116 | 18 | 55 | 75 | 29 | 31 | 35 |
| 不熟練工 | 26 | 20 | 41 | 5 | 7 | 19 | 21 | 14 | 23 |
| 男子 | 652 | 562 | 568 | 220 | 287 | 264 | 427 | 320 | 342 |
| 女子 | 676 | 738 | 821 | 223 | 355 | 475 | 445 | 418 | 405 |
| 計 | 1,328 | 1,300 | 1,389 | 443 | 642 | 739 | 872 | 738 | 747 |

1)　その年にいくらかでも工場で働いた全人数。(第5表の「合計」)
2)　その年に工場で働きはじめた人数。
3)　12月末に働いていた人数。全数と残数の差がその年の退社数となる。

置を行なおうとしている、と考えれば、年齢構成の項でみたことがここでも其本的に妥当しよう。(17)

職種と安定性の関係では、まず男子では「技術を要する熟練工ほど高い安定性を示すであろう」という常識的予測が当たらないことに注目したい。確かに、「貴族」層の安定性は高い。だが、一九〇八年の残留率の高い順に職種を並べると、手工業者（八七・五％）→職長→織布補助→不熟練非機械工→紡績工→織布工→不熟練機械工（四八・〇％）となる。こうした差ができる原因としては、各職種の年齢構成の差が挙げられる。年齢別残留率をみると、一四―一六歳六八・三％、一七―二一歳四七・七％、二二―三〇歳五〇・九％、三一―四〇歳五七・八％、四一―五〇歳八〇％、五一―六〇歳七二％、六一―七〇歳八一・〇％となり、一七歳以上では基本的に年齢とともに安定性も高まる傾向にある。しか

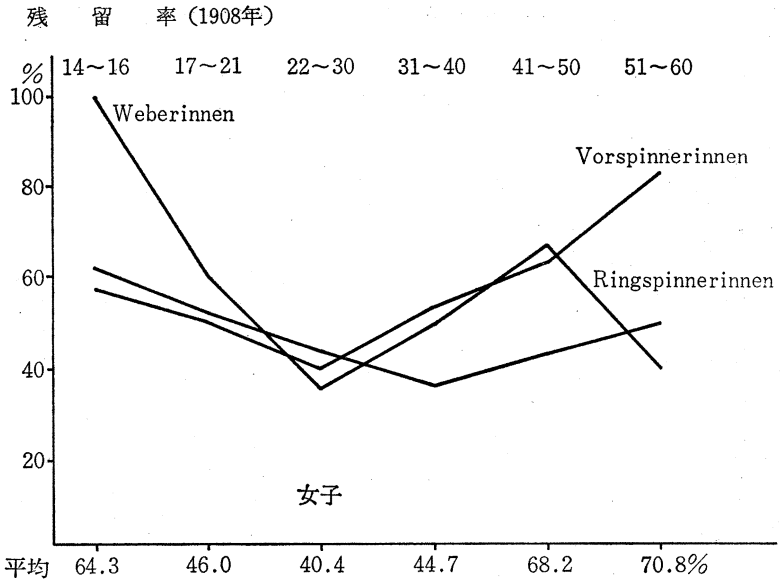
しこのことも含めて、職種という観点からすると（熟練・不熟練）機械作業工ほど安定性が低い、あるいは安定性低下は機械労働の随伴現象とみられる、といえよう。

女子では年によって差が大きく、明確な変化・職種間隔差が出てこない。例えば織布工は、年齢構成の変化と同様に、一八九一年では残留率五九・一％で最流動職種のひとつであったが、一九〇八年には女子平均を上回わる五三・七％であった。それでもいくつかの特徴は把握できる。一九〇八年の数値でみると、まず不熟練工の五六・一％と綛取工の五七・三％が高い安定性を示し、練条工三〇・二％、撚糸工四五・九％が最流動グループをなす。その中間に織布工、紡績工が位置する。この年の不熟練工の入社年齢をみると、一九人中三一歳以上が一一人もいる。この職種では、職業選択の理由に困窮 Not を挙げた者が多いことを考えあわせると、彼女たちは困窮のために高齢になって工場に働きに来ざるをえなくなり、従って容易に退職しようとしないであろうことが考えられる。男子でもそうであったように、安定性の高さはひとつには平均年齢の高さの反映である。綛取工の高い安定性には、既に述べた特殊性があずかっていよう。(18)

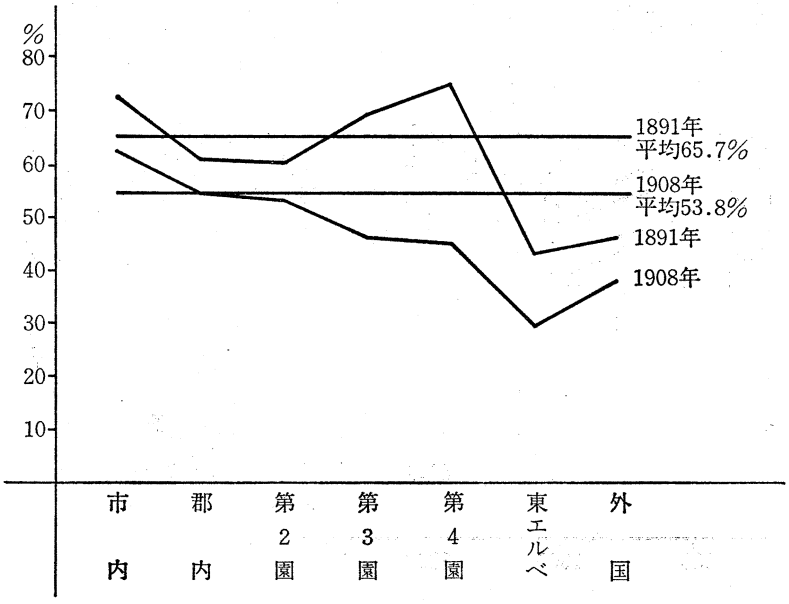
年齢別の残留率をみると、一七―三〇歳で男子が四九・一％、女子が四三・六％でやや低い。ここでは特徴的な職種差がみられる。男子織布工は一四―二一歳で男子平均値を上回わっているが、二二―四〇歳では平均をかなり下回わり、四一―五〇歳でもやはり低い。女子織布工でも一四―二一歳で女子の平均以上、二二―三〇歳で平均以下という偏よりをみせる。また精紡工でも一七―三〇歳で平均以上であるが、三一歳以上では平均を下回わっている。つまり、以上の熟練三種では、他の職種に比してヨリ高齢になってからの移動が比較的多い、といえる。これに対し男子紡績工は、一四―二一歳では織布工よりも低い数値であるが、二二―五〇歳では逆に織布工を、さらには平均値をも上回わる安定性を示す。粗紡工にしても二二歳以上では年齢とともに安定性を高めている。

出生地別の残留率をみると、一九〇八年では端的に言えば、出生地までの距離と流動性が比例関係にある。とくに第3・4圏出生者は絶対数でも（前出）安定性でも低下しした。ひとつの選択過程といえよう。出生地人口規模の残留率でも一つの傾向が明瞭にあらわれる。まず男子では中都市出身者の安定性が定く、つぎに小都市出身者の安定性上昇が目につく。そして大都市を別にすると、出生地の人口の大きさと残留率が比例関係に立つようになった。女子では村出身者が数字を下げつつも五四％と平均以上を保っているが、町出身者が絶対数（前出）も安定性も低下させている。これにかわって小都市の相対的な上昇をみることができる。

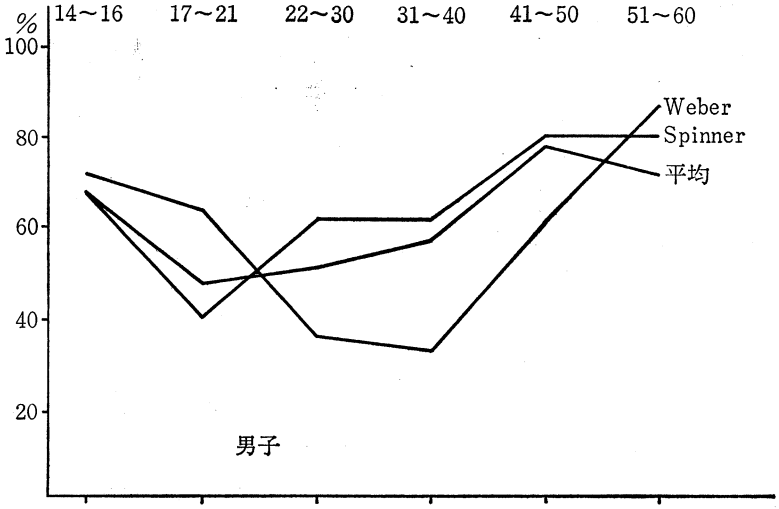
ここに指摘した諸傾向や職種間の相違、年令の選択作用等は、労働者の工場外生活の理解にも大きな意味をもつが、その点は、「心理物理学」的研究と共に改めて検討したい。


残　留　率（1908年）
%
14～16
17～21
22～30
31～40
41～50
51～60
100
80
60
40
20
Weberinnen
Vorspinnerinnen
Ringspinnerinnen
女子
平均
64.3
46.0
40.4
44.7
68.2
70.8%

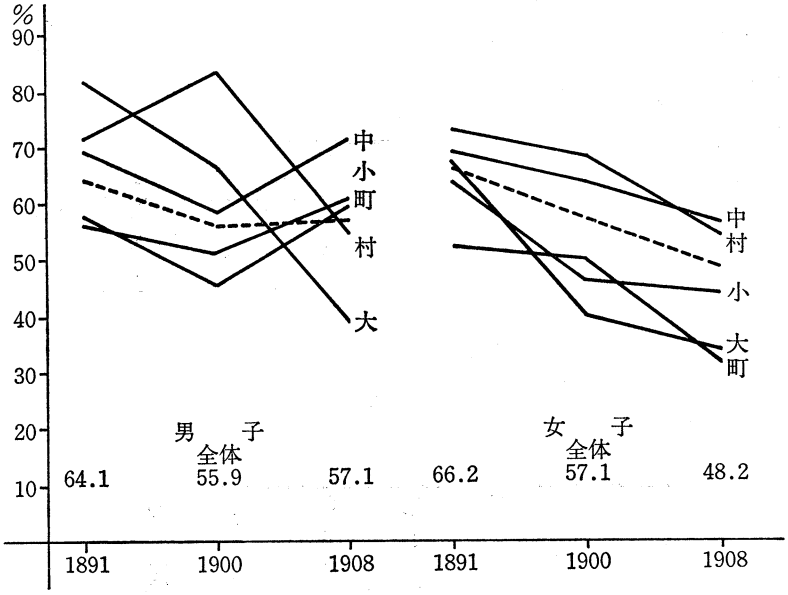
**第8図**　出生地別残留率


%
80
70
60
50
40
30
20
10
1891年
平均65.7%
1908年
平均53.8%
1891年
1908年
市内
郡内
第2園
第3園
第4園
東エルベ
外国

第7図　年　齢　別




第9図　出生地人口規模別残留率



(1) 手工業者又は修繕手工業者 Reparaturhandwerker と書かれており、修繕工のことである。S.15, usw.

川本和良氏は「ライン繊維工業における直接的生産者の状態と『三月運動』」において、ベルナイスのこの会社に関する研究*から一八九一年の労働者数及びこの時期の労働力構成を参考に掲げておられるが（同、前掲書、一四三―四ページ）、そこでこの手工業者を「修繕手織工」とされている。これは誤まりであろう。

* M. Bernays, *Die Geschichte einer Baumwollspinnerei, ihr Produktionsprozeß und ihre Arbeiterschaft* [Dissertation], Heidelberg 1910.（筆者未見）

(2) 賃銀は Anmacher で本工の約七五%、Aufstecker で四八%を得る。

(3) 職名としては Zwirnaussucherin と Copseinlegerin の二種が挙がっている。

(4) ただ一九〇八年にはクロス繰返し工 Kreuzspulerin が加わっている。以上の工程・職種については SS. 14-17, 252-265.

(5) SS. 22-26, 47-51. ベルナイスの示す数値は主にパーセンティジであり、算出の基礎となる絶対数はおさえずらい。累計しても彼女の示す合計にならぬ場合が多く、また未回答・欠落の処理方法も示されていない。さらに誤記や計算ミスも当然あると考えて、いくつかの表から第5表の数値を作成した。私の示す比率は可能な限り第5表の数値をもとにしている。パーセントは小数点以下第二位を四捨五入した（彼女は第二位切り捨てである）。彼女のパーセントの合計はおおむね一〇〇未満、一〇〇以上のこともしばしばあった。ただし、実数で三桁となる箇所でのパーセント数が私の計算と一・〇以上違うことは少ない。

(6) 以下、a→bとは一八九一年aと一九〇八年bの変化を、a→b→cとは一八九一年a→一九〇〇年b→一九〇八年cの変化を示す。

(7) SS. 65-91, 118-124.

(8) 原文は Stadtkreis-Kreis-Regierungsbezirk-Provinz-Land-Reich である。この区分も六圏区分も、ヨリ小さな単位の累計値を除いたもののみをその項の数値としている。例えば県内とは、グラートバッハ郡以外のデュッセルドルフ県の数である。

(9) SS. 103-124.

(10) 一九〇九月のアンケート七二〇通がデータになっている。

(11) そのうちわけは、織布工二四、紡績工一一、不熟練工四二、職長九、手工業者三、上級職長一である。

(12) ある職種に就いた特定社会層出身者数がその職種の合計人数中に占める割合／その層出身者合計が全労働者中に占める割合（男女別）。これを出自別就業職種特化指数と呼んでおく。手工業者の息子が工場内の修繕手工業者となる場合は、Cの修繕手工業者への特化指数＝15／39＋61／316＝0.3846÷0.1930＝1.992で示される。

(13) S.110, 130.

(14) SS. 118-124.

(15) SS. 190-205. この項に限ってベルナイスの数値はかなり正確のようである。つまり、男子にとってはこの検査が、合否にかかわらず、重要な体験となっていることが、間接的に証明されている、と考えたい。

(16) SS. 29-32, 39-46, 52-63, 92-101,

(17) 女子に関しては数値があやしいので数字を出せなかった。
(18) S.126.